



### Special Interview

園田茂人 東京大学東洋文化研究所 教授



#### ●中国社会学との出会い

—園田先生のご専門は社会学ですが、これまでどのような研究に取り組んできましたか。

「先生はどんな研究者か」という質問は、なかなか答えにくいですね。敢えてキーワードを3つ挙げるとすれば、「企業」「中国社会」「対外認識」になるでしょうか。大学入学当初から社会学を志していたので、社会学科に進学後、迷わず富永健一先生のゼミに入りました。そこに初めて北京大学から留学生がやってきました。面白いなと思って調べ、中国では長い間（1957～79年）「社会学はブルジョアの科学だ」として禁じられていたことを知りました。私はその留学生と親交を深めたのですが、その彼が言うには「富永先生は来年、中国に招聘されるよ」と。直感的に面白そうだと思い、1984年、私が修士1年生の時に、富永先生の講義の手伝いをするため、中国社会学の復活拠点であった南開大学に行きました。当時外国人研究者はすごく警戒されていて、農村見学もままならない状態でした。では何ができるのか？これが自分の研究における最初の関心でした。中国が対外開放し、社会学のような外来の学問を受け入れると、中国はどのように変化するのか。それを理論的に考察すべく、当時まだ市民権を得ていなかった「グローバリゼーション」という概念を使って、中国の社会がどう変化するかに関する作業仮説を立てたのが、私の研究の出発点でした。

#### ●「企業」を通してアジアをみる

—1つ目の「企業」の研究はどのようににはじまったのでしょうか。

私が中央大学の講師になったのが1990年です。1985年にプラザ合意があって、日本の企業が大量にアジアに進出します。1970年代初頭、日本の企業は、特にタイとインドネシアで強い反発に遭いました。ところが、80年代の集中豪雨的投資では、日本企業は「ゴーホーム」とは言われませんでした。以前に生じた反発が起こらないのはどういうことなのでしょう。そもそも日本企業で働いている従業員は現地人の使い方をどう評価しているのだろう、という問題関心が生じたのですが、実はそういうことをやっている経営学者はいませんでした。地域研究的なスタイルでないといけない研究だったからです。

そこで1991～92年に通産省の委託を受けて、私の兄弟子である今田高俊（東京工業大学）先生などと一緒に、東南アジア3カ国（タイ、マレーシア、インドネシア）、その次に中国大陆と台湾、この5つの地域で、合計1万人以上の現地従業員を対象に質問票調査を実施しました。いろいろな発見がありましたが、その1つに「接触仮説」を問い直すというものがあります。接触仮説とは、偏見をお互いに持ちそうな人間が接触すると、相手に対する理解が増え、偏見が弱まるというものです。ところが実際に調べてみると、タイの日本企業では、タイ従業員と日本人の間では接触仮説が成り立ちましたが、中国では逆でした。中国では、日本人とよく接触する中国人従業員ほど、日本人に対してよく思わなくなっていたのです。

社会心理学や社会学は、ある種の「普遍」を問う学問で、接触仮説もその1つの形態です。しかし、日本人とタイ人、中国人と日本人とのインターフェース（接触）のあり方が違えば、出てくる普遍的テーゼも違って来る。特に中国に関しては接触仮説と違う現実があるわけですから、中国の人たちがどのような企業観、勤労観を持っているのかを理解する必要があります。企業という入り口からその先にある社会の姿を見ていくことが、比較社会学の研究として重要なことを痛感した瞬間でした。実際、誰もこのフロンティアには足を踏み入れていなかったのですから。（[企業や中国社会の研究成果をもとにした中国人論に、『中国人の心理と行動』があります](#)）



園田茂人『中国人の心理と行動』  
NHK ブックス、2001年

## ●ようやく開かれた「中国社会」

－「企業」から「中国社会」の本格的な研究へと発展していくわけですね。

1990年代後半になると、中国でも社会学が広がります。そして地場の研究者が自分たちの社会を理解すべく、様々な方法や手法を身に付けようとし始めます。そうした時代状況にあって、共同研究を進める環境が整います。実際、中国の4都市で、一般の市民がどのような価値観やライフスタイルを持っているのかという大規模な質問票調査を行うようになりました。興味深い結果の一つに、「党と政府は人民にとって何が最善かを知っている」という質問に対してイエスかノーかを聞くと、9割近くがイエスと答え、党の支配に対する正統性を認めていた、というものがあります。実際にインタビューしても、改革開放によって生活水準が向上し、党のやり方には意見もあるけれど基本的には満足しているとする回答が多く得られました。

ところが、一部の研究者からは「政治的なタブーがある中国で、みんなが本音を語るはずがない」と批判的なコメントが出されました。これには、カチンときました。研究者が自らのストーリーを作り上げる際に依拠している「知識人」は、本当に一般の市民を代表しているのかと。悔しかったので、1997年、2004年、2012年と、ほぼ8年おきに経年調査を行ったのですが、結果は同じでした。さすがに3回目の調査ぐらいで、批判的なコメントを出されていた研究者も事情を理解してくださったようです。ともあれ中国が対外的に開かれていって、中国の研究者が私のような外国人と一緒に協働し、一緒に考えることができる時代が訪れた。これが2010年ぐらいまで続きます（社会階層や教育、ジェンダーなど広範な社会問題を、データをもとに展開した一冊が『不平等国家中国』です）。



園田茂人『不平等国家 中国』  
中公新書、2008年

## ●「対外認識」の研究へ

－そして「対外認識」の研究へつながるのですね。

ええ。この時期、中国国内の問題に関心をもつ地場の研究者が多くいるのだから、自分は中国を、徹底的に外から見ようと考えたのが「対外認識」の問題です。当時、日中関係がすごく劣悪になっていました。日本人が中国をどう見ているかを理解する際、対象は中国ではあっても、日本人のメンタリティーも理解しなければならない。これは、社会学や社会心理学を使った中国研究ですが、それ以上に日本研究の色彩を帯びています。同じことが、例えばタイ人が中国をどう見ているかにも言えます。タイ人の中国認識は、タイ人・タイ社会を、理解しないと分析できません。ところが、タイ人の中国認識がわかったとしても、例えば、なぜ他の東南アジアではタイと似た現象が見られなかったのかといった、他地域との比較も必要となります。こうなると、1人では手に負えない研究になってきます。「企業」の研究は1人でもできなくはないけれども、複数地域の研究となると多くの人々との協力が必要となります。「中国社会」の研究は、もともと中国人のパートナーと一緒にやってきたのが、彼らが力を持つようになって自分は不要な存在になった。最後の「対外認識」に関しては、見る側と見られる側の問題もあるし、見る側が違っていると見られる中国のイメージが違うので、たくさんの人たちの知恵を集めないと問題を解決できない。こうした研究の延長線上に、Global Asian Studies (GAS) という発想が生まれてきたのです。

## ●Global Asian Studies (GAS) が目指すもの

－GASとは何を指し、どのような活動を行っているのでしょうか。

GASが設立される以前、東文研には学内のアジア研究者をネットワーク化する「アジア教育研究ネットワーク」(ASNET)と、日本内外の日本研究をめぐる対話を進めるGlobal Japan Studies (GJS)という2つのプログラムが存在していました。いくつかの理由で2022年までには終了してしまいましたが、これらを継承・発展させる形で設立されたのがGASです。

GASの最大の使命は、アジア研究者間の対話を促進することです。現在は、GJSを継承して国外の日本研究者との対話を促進する『JF-GJS イニシアチブ』と、日本のアジア研究者とアジアの日本研究者の対話を含む、より広い域内での研究連携を強化する『GAS イニシアチブ』の2つのイニシアチブを展開しています。東文研のGASには、2つの独自性があると考えています。アジアの大学におけるアジア研究プログラムは、多くの場合、自国の研究を含みます。しかし日本では、長らく日本をアジア研究の対象とはしてきませんでした。この慣習に挑戦し、日本を含めたグローバル・アジア研究を提案することが第1の独自性です。もう1つの独自性は、東文研にアジア各地域をカバーする多様な研究者がいることです。海外の似たプログラムでは、グローバル・アジアといっても、特定の地域、特定の学術領域が意識された作りになっていますが、その点で東文研は異なっているのです。

中島教授(東文研所長)は「東京学派」の研究を推進して、東大における学問史の正負の遺産を掘り下げています。「京都学派」に比べて「東京学派」について話す人は限られています。「東京学派」は「京都学派」に比べてより包括的で多様性があり、流動的で捉えるのが非常に難しいですが、この概念を利用して、アジア研究の名の下に先達の足跡を振り返ることは、世界のアジア研究をさらに発展させることになるでしょう。



## ●アジア研究のアジア化／普遍化

—前号での中島隆博所長とのインタビューで、「アジア研究のアジア化／普遍化」というキー概念が出ていました。

園田先生のお考えはいかがですか。

「アジアのアジア化」という概念は、2000年代初頭に経済学者の渡辺利夫先生（東京工業大学教授、のちに拓殖大学学長）が提唱したものです。従来は理念としてのみ存在していた（東）アジアが、域内での貿易が盛んになることで連結をつよめ、実質化したことを指す概念です。それを私がおもって、アジアを語る行為の主体が変わる現象を指して「アジア研究のアジア化」といい始めました。アジア政経学会の会長を務めていた2017年から2018年にかけてのことです。

知の生産の重心が変われば、アジェンダ・セッティングも変わってきます。先ほど日本企業のアジア進出の話をしたことが、いまや韓国や中国、東南アジアの人々が国を超えて、消費者、生産者として出会っています。90年代の日本にとって重要だった問題が、アジアのどの地域にも当てはまるようになったのです。結局、研究上の問いは、観察者の知的な風土に影響を受けている。これは今までの社会科学の盲点であった、「見る場所によって見えるものが違う」という当たり前のことを、研究の中に織り込んでいく必要があることを意味します。「アジア研究のアジア化」は、そうした知的実践にもつながります。

「アジア研究の普遍化」を実践するのは大変です。普遍化とは消失点のようなもので、本当にあるかどうか分からないものの、それがあろうと思うことによって、研究のアジェンダが生まれ、具体的なアイデアが生まれてくる、そんなものだと思います。普遍的といわれるものにも無視できない例外がたくさんある、中国やアジアは、その宝庫といえます。例外とされてきた事象を普遍化の対象とすることで、今までの前提で何がおかしかったのかを振り返るきっかけとなるはずですよ。

—「園田先生の研究史はまさに中国現代史である」そう感じさせられるお話でした。どうもありがとうございました。

（聞き手：上田、キム、タンシンマンコン、写真撮影：野久保雅嗣）

東文研では、5つの部門（汎アジア、東アジア、南アジア、西アジア、新世代アジア）がそれぞれ研究を進めるとともに、所内外で連携したさまざまなプロジェクト（GAS、EAAなど）が動いています。最近の出来事をいくつかピックアップして紹介します。

## News

### 【UTSA】アジアの知を世界の知へ！東京大学東洋文化研究所アジア研究叢書が創刊！



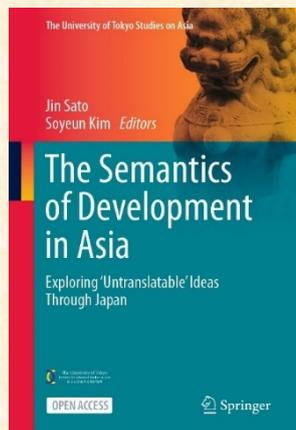
GASの活動に加え、東文研ではアジアでなされている優れたアジア研究の成果を英語で発信して、広く世界の研究者や学生に提供する英文によるアジア研究書シリーズである *The University of Tokyo Studies on Asia (UTSA)* 『東京大学東洋文化研究所アジア研究叢書』（責任者：松田康博教授）という一大プロジェクトを進めています。

この度、その第1巻、第2巻がSpringerからオープン・アクセスで創刊されました。

[https:// www.springer.com/series/17024](https://www.springer.com/series/17024)



この活動には東洋文化研究所基金に寄せられた寄付金も活用します。アジア研究80年の蓄積に裏付けられた本研究所が、今後も継続的に「アジアに根ざしたアジア研究」を無料で世界の研究者や若者へ発信し、平等な学びの機会を提供できるよう、皆様のご支援をよろしくお願いいたします。（寄付については巻末をご確認ください）

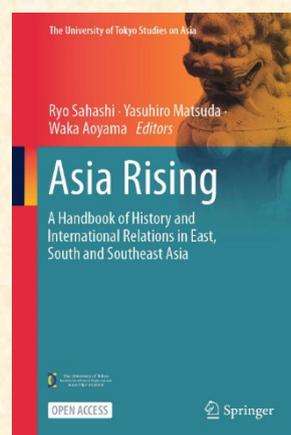


Jin Sato and Soyeun Kim (eds.)  
『The Semantics of Development in Asia:  
Exploring 'Untranslatable' Ideas  
Through Japan』  
X+ 243頁、2024年5月刊行



Ryo Sahashi, Yasuhiro Matsuda and  
Waka Aoyama (eds.)

『Asia Rising: A Handbook of History and  
International Relations in East, South and  
Southeast Asia』  
X+ 304頁、2024年9月刊行



## 【国際交流】

### 中国絵画の歴代コレクションが揃うー

浙江大学より『中国歴代絵画体系』が寄贈されました。このシリーズは中国絵画の代表的名品 12,405 件を収録するもので、現在、紙本印刷でみることのできる最も高精細な画像資料となります。

2024 年 7 月、新たに 132 冊が寄贈され、東文研ではすでに所蔵されていたものを加えて合計 231 冊のコレクションとなりました。さらなる絵画研究の活性化が期待されます。



寄贈式にて金曉明教授（浙江大学）と中島隆博所長

## 【研修】

### 漢籍の整理技術を学び伝えるー

東文研では全国の図書館等職員を対象とした「漢籍整理長期研修」を毎年開催しています。

1980 年から継続している本研修は、東文研内外の専門家による講義と個別指導（実習）を通して、漢籍に関する幅広い知識を習得していただくものです。本年度は東文研からは大木康名誉教授、上原究一准教授、柳幹康准教授が、6 月と 9 月の各第 1 週の講習期間に講義と個別指導を行いました。



参加者に個別指導をする上原究一准教授

## 【高校生訪問】 未来のアジア研究のためにー

将来のアジア研究の担い手を育成するため、東文研では定期的に高校生訪問を受け入れています。2024 年 8 月、熊本高等学校の学生 48 名、引率の先生 2 名が校外活動として東文研を訪問しました。

当日は柳幹康准教授（中国仏教）による講義と図書室内の書庫見学を行いました。今回の訪問により、大学での勉強に期待を持ってもらえたようです。アジア研究の芽がいつか花開くことを願っています。

他にもラ・サール高等学校、奈良高等学校の高校生訪問も受け入れました。



東文研図書室で高校生を案内する柳幹康准教授

## People

Kai Vogelsang 先生が「新世代アジア研究部門」の客員教授として着任されました。

### 【着任研究会 & 東文研セミナー】 儒教思想の社会的起源をたずねるー

2024 年 7 月 25 日、Kai Vogelsang 客員教授による着任研究会「儒教思想の社会的起源」が開催されました（司会 中島隆博所長）。社会学的視座から孔子の『論語』を読み直し、当時の新たな社会構造のなかに置かれた歴史的象徴として孔子を位置付ける解釈が披露されました。会場からは、多文化圏（イスラーム圏など）との比較、清代哲学者の孔子解釈、「礼」概念の複数性などに関する活発な質疑応答が交わされました。

#### Kai Vogelsang

1997 年、ハンブルグ大学にて博士号（中国学）。ドイツ・中国・日本の大学で教育研究に従事したのち、2008 年よりハンブルグ大学中国学教授。主著に『中国と日本：一つの空の下での二つの帝国』2020 年 Alfred Kroner 社、『中国史』2012 年 Reclam 社（全てドイツ語）など。2024 年 7 月から 10 月まで、東洋文化研究所客員教授として着任。



（写真：野久保雅嗣）

## 東洋文化研究所基金 ご支援のお願い

東洋文化研究所の活動を支えるため、ご支援をお願いします。

\* 本基金へのご寄付には、本基金と東京大学基金の両方の特典が適用されます。

詳しくはホームページをご覧ください。

\* 寄付特典の発送は日本国内に限らせていただきます。

<https://utf.u-tokyo.ac.jp/project/pjt180>



東洋文化研究所 News Letter No. 2  
2024 年秋季号（編集担当：上田、寺内）  
（写真：野久保雅嗣）  
東京大学東洋文化研究所  
〒113-0033 東京都文京区本郷 7-3-1  
Email: [webadmin@ioc.u-tokyo.ac.jp](mailto:webadmin@ioc.u-tokyo.ac.jp)